

私の守りたい八十本

～おうち衛生士になって～

高萩市 匿名希望

少し前、部屋の掃除をしていたら長男を出産した日に病院で書いた記録用紙が出てきた。赤ちゃんの排泄、授乳回数、体重などが記されている中に、

「これから私がママでよかったと思ってもらえるように頑張る。」

と書かれていた。小さな文字ではあるが、力強く書かれたその文章を見て、あの日密かに決意表明のつもりで記したなと記憶が蘇ってきた。自分はどんな母親になるんだろう、子どものために何が出来るんだろうと、答えの出ない思考の中で記した一文でもあった。

突然だが、私の職業は歯科衛生士である。業務内容は多々あるが、基本的には年齢や性別を問わず、長期に渡って同じ患者さんを担当しながら口の中の清掃やセルフケアの指導を行っていく。そして口の健康維持を図っていく、いわゆる予防歯科の分野に携わっている。そんな私は現在、十六歳、十四歳、九歳の母だ。子育てをしながら働いているワーキングマザーだ。

赤ちゃんの歯が生えていない時期を経て、下の前歯がちょこんと顔を出すと微笑ましくなり、上の前歯が抜けて少しとぼけた顔になるのも愛おしいと思った。当然歯が生えてきてからというもの、毎日の仕上げ磨きは欠かさず行ってきた。私の膝の上に小さな頭を乗せてその重みをかみしめる。こっそりと頭をなでて行う仕上げ磨きは至福の時だ。しかし、徐々に子どもの口に対して異様な熱が入り始めた。歯科衛生士の子にむし歯が無いのは当たり前というプレッシャーがあった。そして、子どもにはむし歯で痛い思いや辛い治療はさせたくないという思いもあった。そしていつの間にか、専門家としての目線で子どもの口の中を見るようになっていたのだ。おうち歯科衛生士の誕生だ。

乳幼児の頃、少し遅めの帰宅で子どもが寝入ってしまっても、口をこじ開けて仕上げ磨きをした。糸ようじの使い方と必要性をしっかりと教えて一日三回きちんとやらせる。間食は決められた時間のみなどこうして書き出してみると、子どもたちにとっては細かすぎる。そして夜は仕上げ磨きを絶対にするという事を徹底していた。完全にプロ目線だ。長男が高校生の今でも、それらは変わらずに続いている。実家に泊まりにいくと、実母から

「そんな年齢になっても仕上げ磨きをするのはちょっと過保護じゃない。小学校に上がるまでだよ。」

と笑われた。私は、子どもの歯を守りたい一心だったので寝耳に水である。そうか、歯科に携わりのない人の感覚はそうなのかとギャップに気が付いた。しかし、今まで行ってきたこの夜のルーティンは今更やめられないのだ。誰が何と言おうと私はこのスタイルを貫くのだ。どんなに子どもが大きくなろうとも膝の上に乘せて仕上げ磨きをするんだ、と私を燃え上がらせる。

でも、そんな事を言われると、子ども自身はどう思っているのだろうと母としては気には

なる。思い切って尋ねてみると、

「プロに毎日磨いてもらえてラッキーだな。」

「自動歯磨きロボットみたい。」

と、何だか予想外だ。恥ずかしくないのかと切り込んでみると、

「それよりもむし歯になる方が嫌かな。折角何もなく過ごせているし。」

とのことだ。世間とのギャップに文句の一つも言われるのかと身構えていたのだが。今、皆まさに思春期真っ只中で、反抗してくる事も多いけれど、毎日の仕上げ磨きには必ず応じてくれるのはこんな気持ちだったんだと驚いた。そして毎晩行われている仕上げ磨きを通してコミュニケーションを取っていたんだと気付いた。これは嬉しい誤算だ。必ず一日一回は目を見ての会話がある。思い返してみると、日々忙殺されてなかなか話を聞いてあげられなかったと反省する時もあるが、仕上げ磨きの時に学校の出来事を話していたではないか。子どもに触れて癒やしをもらっていたではないか。私と子どものお互いにとって貴重な時間だったんだと思う。

毎年、学校歯科検診の紙にむし歯無しと書かれているのを見て、子どもたちは得意気だ。そして私はこっそり胸を撫で下ろす。

「よかった。むし歯なしだよ。お母さんのおかげ」と屈託なく笑うわが子たちを見ると、あの日病院で決意表明した日を思い出す。口の中に関しては私がママで良かったと思っているよと、あの日の私に伝えたい。一般的ではないかも知れないが、これが私の愛の形だ。これから子どもたちは体も心も口も変化していき、やがて親を離れる日が来るだろう。それまではどうか、この母親兼おうち歯科衛生士に付き合ってね。今晚も三人分の八十本を守るために、私は奮闘するだろう。